

願いや思いを実現する「自分タイム」の支援について

—第5学年「自分タイム」の実践から—

谷 栄 次

1 これまでの実践の成果と課題

本校では、平成9年度から「自分タイム」の実践を積み重ねてきた。これまでの実践から次のような成果と課題が明らかになっている。

- | | |
|----|--|
| 成果 | ○自らの課題を追究することを通して、自分の考えに基づいて実行するたくましさ、工夫して取り組もうとする柔軟さが身につけてきている。
○子どもたちが「自分タイム」を楽しみながら取り組んでいる。
・自分のやりたいことを自分のペースでできる楽しさがある。
・分かった喜び、できた喜び、みんなに伝える喜びなどが味わえる。 |
| 課題 | ○課題づくりに対する支援をどうすればよいのか。
○追究活動で深まりや広がりを生み出すための支援はどうすればよいのか。
○活動をふりかえるのにどういう視点を設ければよいのか。 |

本稿では、課題づくりに対する支援と追究活動で深まりや広がりを生み出すための支援、この2点に焦点を当てることにする。それは、「自分タイム」の活動が、子どもたちの目的意識に支えられ、意欲的な追究活動となるためには、まず課題づくりが大切になるからである。また、追究活動においては、質的な高まりを求めていかなければならないからである。この2つの支援の在り方について、5年生の実践を通して具体的に述べていくことにする。

2 「自分タイム」実践の概要 —第5学年前期の活動から—

「自分タイム」の時間設定は、オリエンテーション・課題づくり・計画に3時間、追究活動に13時間、まとめ・表現に4時間、ふりかえりに1時間の全部で21時間とした。



—追究（駅を訪ねて）—



—追究（中間発表）—



—発表会—

3 支援の在り方について

(1) 課題づくりの支援について

子どもたちの目的意識を高め、意欲的な追究活動につながる課題を作るためには、一人ひとりの願いや思いに支えられていることが不可欠である。子どもたちが自ら課題を決めるとき、「何をしたいのか」と自分自身へ問いかけ、「本当によいのか」とさらに問いかける。そこに、迷いも生じてくる。「もっとこうしたい」と思いがふくらむこともある。このような子どもの内から生まれる「問いかけ」「迷い」「ふくらみ」こそが、願いや思いの土台となる。そうした思いの耕しが子どもたちの意欲的な追究活動につながっていく。

そこで、これまでの経験や今の自分への「ふりかえり」を核とし、「考える」、「選ぶ」、「深める」、「決める」という5つのステップを設定する。

課題を決めるまでの5つのステップ	
①ふりかえる	4年生の「自分タイム」での課題や追究方法、成果や思いについてふりかえる。
②考える	今回の「自分タイム」でやりたい課題をいくつかあげる。
③選ぶ	本当にやりたいことは何なのかを自ら見つめ、一つを選ぶ。
④深める	選んだ課題について、「今の自分はどの程度知っているのか」「だからこの自分タイムでは、何をどこまでやりたいのか」を具体的にする。
⑤決める	自分のことばで課題をつくる。

課題を決めるまでの過程の例

ステップ	A児の場合	B児の場合
①ふりかえる	<ul style="list-style-type: none"> ・4年の時は編んでぬいぐるみを作った ・挑戦して、できた時はうれしかった ・手芸でも他のことをしてみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年も4年も編み物だった ・わからないときには友だちと考えた ・ちがうことをちがう友だちとやりたい
②考える	<ul style="list-style-type: none"> ○ぬいもの ○料理 ○アメリカについて ○ボール投げ 	<ul style="list-style-type: none"> ○バレーボール ○バスケットボール
③選ぶ	●ぬいもの	●バレーボール
④深める	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年の夏に手芸教室に行き好きになった ・本を見てマスコットを作りたい ・デザインしてフェルトで何か作りたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビを見てルールは知っている ・練習して試合をしたい ・バレーボールをする友だちがいないのでは ・クラブでバスケットなら試合もできる
⑤決める	「手芸と工作の達人になろう」	「バスケットのシュート名人になろう」

A児は、追究活動で、本を見ての熊のマスコット作り、その経験を生かして自分で考えたハムスターのマスコット作り、また自分がデザインしたものさし入れとティッシュケースを作り、課題に対する思いを見事に実現させた。A児のように、目的意識に支えられて追究活動ができたのは、課題づくりの支援における「深める」段階で、自らやりたいことに向き合い、何をどうするのかを明確にすることができたからだと考える。

B児は追究活動で、シュートの打ち方やボールの持ち方を調べ、練習をくり返していた。しかし、活動全体のふりかえりから、もの足りなさを感じていることがわかった。それは、一人で活動し、練習方法に困ったことが大きな原因だったようである。B児に対しては、課題づくりの支援における「深める」段階で、「どんな練習が考えられるのか」という言葉かけが必要だった。

(2) 追究活動で深まりや広がりを生み出すための支援について

深まりや広がりを生み出すために、前時のふりかえりを重視する。追究活動を基本的に80分とし、最初の10分で前時でのふりかえりを確認する。そして本時の追究活動に入り、最後にふりかえり思いをもつ、このくり返しで活動の質的な高まりが期待できる。

具体的には、ふりかえりの記述を「うまくいったこととその理由」、「失敗したり、困ったりしたこと」、「次はこうしたい」、「友だちとのかかわり」などのキーワードでまとめ、1枚のプリントにして提示する支援を行う。そうすることで、良さを全体へ広げることができ、問題点を話し合うこともできるからである。



ある児童は、新幹線の種類や区間について調べる追究活動に取り組み、その時のふりかえりでは「コンピュータを使ったがほしい情報がなく時間ばかりがたってしまった」という記述があった。次の追究活動では、休みの日を利用して広島駅へ行き、撮った写真や調べたことを準備して臨んでいたため、全体の中でその良さを取り上げた。そして、コンピュータに時間をとられないための工夫について話し合い、「前もってホームページを調べておけばよい」、「コンピュータを使うのは個人で時間を見つけてやった方がよい」という意見が出された。これは、ふりかえりが次の活動に生かされ、みんなに関係する問題を全体の中でも考えることのできた例である。

アイデアお菓子を作るグループでは、「片づけに時間がかかり終わる時刻が守れなかった」というふりかえりがあった。次の活動では、クッキーを焼く間に片づける工夫が見られた。そこで全体の中で、このグループの良さを取り上げることによって、活動の見通しをもつことの大切さに気づくことができた例である。

また、ある児童は、草花やすずめなど生き物を題材とした詩を作っていた。次の追究活動で、まどみちおさんの詩を読み、感想を書く中で様々な題材があることに気づき、「建物」といった生き物でない題材で詩を書きたいと記述していた。この児童のふりかえりをもとに、本を利用した調べ活動は、わかったことを書き写すだけではないこと、自分の感じたことや思いが大切になることを全体の中で投げかけることができた。「自分タイム」では、このような学び方への気づきを大切に引き取り上げていかなければならないと考える。

4 実践のまとめ

課題づくりに対する支援として5つのステップを設けたことは、子どもたちにとって、次の点で有効であった。

- 課題に対する思いをふくらませることにより、うまくいきそうな予感や期待感を感じることができる。
- 課題の到達点が明らかになったことにより、何をすればよいのか具体的な活動をイメージすることができる。
- 「この課題でよいのか」と再度見つめ直すことにより、課題に対するこだわりが生まれ、自分の中で意識づけができる。

一方、教師にとっても課題に対する子どもたちの思い・思い入れ・こだわりを知ることができ、的確な言葉かけをする上で有効となる。

次に、追究活動での支援として、毎時間のふりかえりを読み合う活動を取り入れたことは、次の点で有効であった。

- 前の追究活動での気づきを再確認し、活動に連続性をもたせることができる。
- 全体の中で認め合うことができ、さらに追究意欲を高めることができる。
- コンピュータの使い方や本での調べ方などみんなで考えたい問題について取り上げることができる。
- 同じ課題を追究したグループの中でも思いのちがいが感じられ、自分と比べることができる。
- うまくいった、失敗した、次は、友だちとのかかわりなどのキーワードをまとめることで、具体的なふりかえりの視点を提示することができる。

課題を追究しながら、子どもたちは新たな問題にぶつかる。実現させたいという願いや思いがあれば、子どもたちは「どうにかしよう」と真剣に考え、教師が思いつかないような様々な方法を考える。自ら時間を見つけて活動する、家庭でも活動する、クラブに活用する、自ら実際に行き調べるなどの姿は、まさにその現れであり、「自分タイム」のねらいである「生活をより豊かにすること」につながっていくものである。